

石川啄木の日本論・対外論

藤 田 昌 志

(三重大学)

ISHIKAWA Takuboku's Perspectives
on JAPAN and East Asia

FUJITA Masashi

Mie University

2012年 11月 30日

日 本 比 較 文 化 学 会

The Japan Association of Comparative Culture

石川啄木の日本論・対外論

藤 田 昌 志

(三重大大学)

ISHIKAWA Takuboku's Perspectives on JAPAN and East Asia

FUJITA Masashi

Mie University

Abstract

ISHIKAWA Takuboku (1886-1912) is one of the most famous Japanese poets in the modern time.

He lived in the time when Japan established the power of the state through the Japanese-Chinese War and the Japanese-Russo War, adopting expansionism to invade neighboring countries. How did he grasp Japan and what kind of thinking did he have concerning China, Korea and Russia in this time? Unfortunately he died at the age of twenty-seven. However the 31-syllable Japanese poems which he wrote are still popular among lots of Japanese people. Most of them feel sympathy with his poems. In this thesis, I would like to clarify his perspectives on Japan and East Asia in relation to his time.

1. 序

石川啄木は、

東海の小島の磯の白砂に われ泣きぬれて 蟹とたはむる

という人口に膾炙した短歌によって日本人の間で夙に有名である。啄木は日清、日露の両戦争を経て日本が国権を確立するとともに膨張、侵略政策を推進する時代に生きた。そういう時代の中で啄木は日本をどのようにとらえ、近隣の中国、朝鮮半島、ロシアに対してどのような考えを持っていたのであろうか。27才で夭折した啄木の短歌は今も多くの人によって愛され、心に強く訴えてく

るものがある。本稿では啄木の日本論・対外論について考察してみたいと思う。次にまず、啄木について、啄木の生きた時代との関係で考察してみることにする。

2. 石川啄木について

石川啄木は1886年（明治19）2月20日に岩手県南岩手郡日戸村曹洞宗日照山常光寺に同寺22世住職石川一禎と、カツ（南部藩土工藤条作常房の末娘で、一禎の師僧であった葛原対月の妹）との間の長男として生まれた¹。二人の姉がおり、啄木は「遅くに生まれた一人息子として家族の愛を一身に受け」²て育った。1887年（明治20）に父一禎が北岩手郡渋民村宝徳寺に転出したことから、一家はその年の3月末に渋民村に移る。1898年（明治31）3月高等小学校三年を終了し、4月、岩手県盛岡尋常中学校に合格、成績は128人中10番で、5年生に米内光政、3年生に金田一京助、2年生に板垣征四郎等がいた³。1901年（明治34）校内で紛争が起こる。2月下旬、授業のボイコットが行われ、啄木もそれに関与した。1902年（明治35）4月、5年級に進級したが、3月期末の試験で不正行為をはたらいたかどで譴責処分に付される。7月、第一学期末の試験においても不正行為をはたらき、再度、譴責処分を受ける。成績、出席状況から落第は必至であった。10月1日『明星』第3巻第5号に短歌「血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひここに野にさけふ秋」が白蘋の筆名で掲載される。10月27日「家事上の都合」を理由に盛岡中学校に退学願を提出し、許可される⁴。10月30日、文学で身を立てる決意をして故郷を出発、上京する。

上京した啄木は11月9日、新詩社の集會に出席し、はじめて与謝野鉄幹に接する。集會の翌日の午後、啄木は渋谷の与謝野夫妻宅を訪れたが、「産後まもない晶子はやややつれをみせ、蒼白い顔色をしていたが、それでもはるばる夫妻を訪れたこのみちのくの少年をころよく招じ入れた。」⁵と言う。

しかし、生計の見通しがたたず、翌1903年（明治36）2月、啄木は父に伴われて帰郷することになる⁶。故郷で家族、恋人の愛情に支えられて身心を回復した啄木は作品発表を再開するが、翌1904年（明治37）の暮に父一禎が曹洞宗宗務院から住居罷免の処分を受けるという椿事が起こる。公的な理由は「宗費滞納」である。「赴任来の檀家との摩擦、啄木の初上京に際しての寺林伐採等の問題が背後にからむ」と言われる⁷。1904年の2月10日に日本はロシアに宣戦布告、日露戦争が始まった。

1905年（明治38）5月3日、処女詩集である『あこがれ』を東京の小田島書房から刊行する。『あこがれ』の文学的な意義は、「明星派の文学活動ないし（明治）30年代の浪漫主義運動との関連において意義づけられるべき」であり、この処女詩集に示された啄木の浪漫主義は、『一握の砂』や『悲しき玩具』『呼子と口笛』が社会主義思想にもとづいているのに対して、それらとは対照的に個人主義思想にもとづくものであった⁸とする識者の言がある。1905年9月5日には日露講和条約が調印されている。この年、啄木は6年来の恋人堀口節子と結婚する。結婚式には出席せず、非常識な言動から「多くの友人が啄木から去った」⁹。啄木には奇癖、奇行とも言うべきものがある。

1907年（明治40）、啄木は5月に函館に渡る。札幌・小樽・釧路を経て翌年の4月に上京するま

で北海道で過ごす。函館では同人誌「紅苜蓿^{べにまごやし}」の編集に携わる。小樽では創刊された『小樽日報』で健筆を振るったが事務長と争うことになる。啄木は事務長になぐられ、憤激して退社する。釧路に移った啄木は1908年（明治41）1月13日に『釧路新聞』に入社する。それも束の間、芸者小奴等との女性問題、主筆との紛糾から3月23日休社、4月24日、海路を経て上京する¹⁰。

1908年（明治41）5月4日、金田一京助の友情により本郷区菊坂町82番地赤心館^{せきしんかん}に同宿し、創作に専念する。上京後、一ヶ月余りで5つの作品300余枚を書く。しかし、小説は売れず、生活は困窮する。6月4日森鷗外宅へ小説の原稿を持って訪れ、出版社への紹介を懇請する¹¹。6月23日、この夜から暁にかけて55首、24日午前50首、25日141首と多くの歌を作り¹²、その中には「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」「たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず」「己^{おの}が名をほのかに呼びて涙せし十四の春にかへる術なし」などの秀歌がある。作ったものの中から144首を選んで翌月の『明星』に『石破集』と題して発表した。

1909年（明治42）1月1日「スバル」が創刊され、発行名義人となる。3月1日から『東京朝日新聞』の校正係となる。4月3日より6月16日にかけて家族を放置しておけない苦渋、作家としての低迷等のため混乱する心理を『ローマ字日記』に綴っている。4月13日に函館の老母から上京したい旨の便りが来る。啄木は当時、東京朝日新聞社に就職したとはいうものの、「年来の借財のため家族を迎える準備ができず、又、文学思想上の煩悶もあって自虐的な生活を送り、浅草の娼妓の許に遊¹³」んでいた。6月16日、啄木の同意を待たずに函館から家族が上京し、同居する。

1910年（明治43）6月に大逆事件^{たいぎやく}が起こる。大逆事件は管野スガ、幸徳秋水等が天皇の血を見ようと話しあったことが、社会主義者26名もの大陰謀にでっちあげられ、次々と逮捕者が出た¹⁴事件である。大逆事件の影響を造型化した啄木の作品としては、「日本無政府主義と陰謀事件及び附帯現象」^{フナロードシリーズ}「V NAROD'SERIES」『呼子と口笛』『悲しき玩具』などがある。「日本無政府主義と陰謀事件及び附帯現象」は戦後、遺族によって発表されたものである。啄木晩年の思想的輪郭を示す重要な作品であるばかりでなく、幸徳事件に関する貴重な歴史的文献の一つである¹⁵という評価が識者から与えられている。大逆事件は日露戦争後、国家による天皇制の制度化と神格化が極端に進む状況で起こった前代未聞の天皇暗殺未遂事件であった。人々の間には大きな衝撃が走った。

1903年（明治35）11月に平民社を創設し自由、平等、博愛を標榜した幸徳秋水は、思想・集会与結社・表現言論・出版その他の自由のために闘った¹⁶。日露戦争のために増税した政府を批判し、「嗚呼増税^{ああ}」を『平民新聞』に執筆した。『平民新聞』は発売禁止となり、前後して非戦論の演説会の中止・解散、『平民新聞』地方読者への干渉が激しさの度合いを増して行く¹⁷。やがて『平民新聞』は発行禁止。国家による弾圧によって「国法の許す範囲内に於」ける言論の闘いから、国家、天皇制との対決へと変貌していった幸徳秋水はクロボトキンの無政府共産主義を理論的支柱とし、テロリズムをも容認するようになる。そして大逆事件が起こる。

大逆事件後、啄木は「時代閉塞の現状」を執筆し、「時代閉塞の現状」が大逆事件を生んだのであり、その究極の責任者は「強権」であると国家の「強権」を鋭く批判している（「時代閉塞の現状」は啄木の死後、友人の土岐哀果善麿^{ぜんまろ}によって1913年（大正2）に『啄木遺稿』に収められて出版されている）。

1910年の9月15日より「朝日歌壇」の選者に抜擢され、12月1日には処女歌集『一握の砂』を出版。12月10日から東京朝日新聞に掲載した歌論「歌のいろいろ」で啄木は「歌作が現実を変更できぬ代償としての「悲しい玩具」^{おもちゃ}」であることを論述¹⁸している。

1911年（明治44）の1月3日には平出修から幸徳秋水の獄中書簡を借覧して感銘し、「人類の社会的理想の結局は無政府主義の外ない」ことを確信した¹⁹。この年には短歌雑誌の体裁をとった、青年に社会批判の視点を持たせるための文芸思想誌である『樹木と果実』の発刊を計画する。しかし、印刷所の不誠意から発刊を断念している。4月15日から長編「はてしなき議論の後」を書き、それは後に「呼子と口笛」と改稿された。この年の2月に慢性腹膜炎となり、一時入院し、後、自宅療養となっている。

1912年（明治45）病苦と経済的困難の中で1月2日の東京市電のストライキに強い関心を寄せる。3月7日母死去。4月5日、父、啄木重態の報により上京する。4月13日早朝危篤に陥り、午前9時30分永眠。父一禎、妻節子、友人である若山牧水等がみとる。享年27才。死因は肺結核であった。6月20日土岐哀果の手によって第2歌集『悲しき玩具』が東雲堂書店より刊行される。

石川啄木を時代との関係で考えると、日清、日露の両戦争を経て、国家権力が天皇制の確立と相まって増大していく。その時代状況の中で、明星派に代表される浪漫主義運動や自然主義が高まり衰えていく（それは換言すれば個人の心情を重視し高らかに謳いあげたり個人の内面を暴露する、畢竟、個人主義の起伏消長を意味していた）。啄木のオリジナリティーは、日本文学に伝統的な政治性からの乖離とは無縁で、国家権力そのものを撃とうとしたところにある。もっとも啄木ももちろん個人主義と無縁ではなく近代的自我に翻弄され苦悩した。文学で身を立てると豪語して中学校に退学届を出したり、自らの結婚式に出席しなかったりしたところにその自らの自我に翻弄された姿、苦悩が隠顕する。

啄木は時に自虐的に、時に感傷的に、また、時には覇気、気概を持って歌った。その自虐性、感傷性、覇気、気概は日本人誰もが持っているものである。そこに啄木が今もなお人々に愛される理由が存在する。くり返すが、同時に啄木は国家権力と対峙しようとした。しようとしたと言うのは啄木が夭折したからそう言うのである。個人主義を持ちつつ、国家と対峙しようとした啄木は日本をどのようにとらえたのであろうか。次に啄木の日本論の考察に移ることにする。

3. 石川啄木の日本論

啄木は日本をどう見ていたのか。「林中書」²⁰1907年（明治40）3月1日発表では「予は日本人である。「今の日本人」である。」と述べ、「今の日本の教育」について批判を展開している。

「今の日本」とは^どどういふ「日本」の事であらう？東洋唯一の立憲国である。東洋第一の文明国である。空前の大戦に全勝を博して一躍世界の一等国になった国である。ト^かどういふと「解り切つてるよ、云はれなくたつて知つてらア」と大向から怒鳴られるかも知れぬ。が然し「今の日本」といふ問題は果して^{しか}然く解り切つた事であらうか。云はれなくたつて知れて居る

事であろうか。果して世界の大道を大跨で歩ける国であらうか。手のいい「赤毛布」^{あかゲット}国ではないだらうか。諸君！予は石塊であるから、滅多に人のいふことを信ぜられないと思ふ²¹。

啄木は日露戦争後の時点で「世界の一等国」になった日本を批判している。続くところで「民衆は依然として封建の民の如く、官力と金力とを個人の自由と権利との上に置いて居る無智の民衆ではないだらうか？」と民衆批判をしている。啄木は更に「今の日本」は「哀れなる日本」である。「哀れなる日本」の教育は果して怎であらうか？」「教育の真の目的は、「人間」を作る事である。」と述べ、続けて反語的に今の日本には「子弟に「人間の資格」を与へる様な人」がほとんどおらず、月給の高い処へ転任し「泣いて別を惜む子弟を土へ捨てて顧み」ない者が多いと言う。日本の教育は「天才を殺して、凡人といふ地平線^{ころが}に転輾^{いしころ}つて居る石塊のみを作らうとする教育者」が多いと批判する。「日本の教育は、凡人製造を以て目的として居る。日本の教育は、其精神に於て、昔の寺子屋教育よりも劣つて居る。日本の教育は、人の住まぬ美しい建築物である。」と日本の教育を批判する啄木は「予は願くは日本一の代用教員となつて死にたいと思う。若し其際自分の理想通の小学校でも建てる必要があつた時には、何卒諸君にも幾何か御寄附を願ふ。」と抱負を述べ「林中書」を終わっている。啄木は1906年（明治39）4月、渋民小学校に代用教員として出勤し始め、その年の7月には小説『雲は天才である』の執筆を開始している。翌1907年（明治40）4月に校長排斥のストライキを示唆した等のために渋民小学校免職の辞令を受けた。

啄木にとっての日本は決して理想的なものではなく、不完全で矛盾に満ちたものであった。純粹で誇り高く、一途な啄木青年はやがて国家そのものを批判、攻撃の対象とするようになる。

1910年（明治43）6月の大逆事件によって啄木は国家批判を鮮明にすることとなった。大逆事件は既述のように天皇暗殺未遂事件であるが、啄木には「反權威の道」²²を歩む氣質が存在し、それは激烈な批判癖と言っても過言ではない氣質であった。

例えば、自然主義文学についての啄木の激烈な批判を例にとって見てみよう。1908年（明治41）2月の評論「卓上一枝」で啄木は「吾人は自然派の小説を読む毎に一種の不安を禁ずる能はず。此不安は乃ち現実曝露の悲哀也。自然主義は自意識の發達せる結果として生れたり。而して其吾人に教訓する所は唯一あるのみ。曰く、「どうにか成る。」「成る様に成る。」」²³突き放すような言い方で自然主義を「どうにか成る。」「成る様に成る。」という教訓しか与えないものと見るのは、「自然主義的人生把握、人間觀念に甘んじえない実生活者としての人間的な批判や要求をそのことばの背後に示しはじめて」²⁴いたからである。啄木は自然主義の事なかれ主義、權威への追従を批判しているのである。大逆事件の2ヶ月後に書かれたが掲載されることはなかった「時代閉塞の現状」で自然主義を批判しているが、それ以前に既に1909年（明治42）12月に『スバル』に発表した「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」²⁵で長谷川天溪の「胡麻化し」と田山花袋の「人としての卑怯」²⁶を痛烈に批判している。

長谷川天溪氏は、嘗て其の自然主義の立場から「国家」といふ問題を取扱つた時に、一見無雑作に見える苦しい胡麻化しを試みたと私は信ずる。謂ふが如く、自然主義者は何の理想も解

決も要求せず、在るが儘に見るが故に、秋毫も国家の存在と牴触する事がないのならば、其所謂旧道德の虚偽に対して戦つた勇敢な戦も、遂に同じ理由から名の無い戦になりはしないか。従来及び現在の世界を観察するに当つて、道德の性質及び発達を国家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である — 寧ろ日本人に最も特有なる卑怯である。

国家の問題を避けて通る日本人の自然主義の事勿れ主義を啄木は「日本人に最も特有な卑怯である」と激烈に批判する。

「時代閉塞の現状」ではより包括的に日本の自然主義文学の持つ「自己主張的傾向」、近代的自我の自覚的な要求・主張と「科学的、運命論的、自己否定的傾向」、当時「純粹自然主義」と言われたもっぱら観照するだけの態度への後退の立場との関係について、ごまかしや卑怯が一般化してきたことへの激烈な批判が展開されている²⁷。日本の自然主義の2つの傾向の5年間にわたる共棲が「全く両者の怨敵たるオオソリテ—国家といふものに対抗する為に政略的に行はれた結婚である」と魚住折蘆が論評していることに対して啄木は、日本の青年は「未だ嘗て彼の強権に対して何等の確執をも醸した事が無い」のだから「国家が我々に取つて怨敵となるべき機会も未だ嘗て無かつたのである。」²⁸とし、魚住の論を批判する。「国家てふ問題が我々の脳裏に入つて来るのは、ただそれが我々の個人的利害に関係する時だけである。」「国家は強大でなければならぬ。我々は夫を阻害すべき何等の理由も有つてゐない。但し我々だけはそれにお手伝するのは御免だ！」これ実に今日比較的教養ある殆ど総ての青年が国家と他人たる境遇に於て有ち得る愛国心の全体ではないか。²⁹と述べる啄木は、敵としての国家の存在を明確に認識することを主張する。自然主義の2つの傾向の「結合」も「両者共敵を持たなかつた。一方は敵を有つべき性質のものではなく、一方は敵を有つてゐなかつた事に起因してゐたのである。」と重ねて述べている。

純粹自然主義が「劃一線の態度を正確に決定し、其理論上の最後を告げて」、ここに「結合」は内部において「断絶」し、「自己主張の強烈な欲求の残つてゐるのみ」であるとする啄木は「強権の勢力」が「普く国内に行きわたつてゐる」今、「我々青年は此自滅の状態から脱出する為に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。」³⁰と国家との対決姿勢を明確なものとする。

啄木は日清、日露の両戦争を経て天皇制国家体制が確立されてゆく中で、日本の現状を批判し、「敵」としての「国家」の存在をその中心に据えたのであった。啄木の日本論は「自己主張の強烈な欲求」の系統から出ずるものであったと考えられる。日本的近代の「自我」から出ずるものであったと考えられる。

歌集『一握の砂』1910年には日本人的な自虐的傾向の短歌が多く見受けられるが、「誰そ我にピストルにても撃てよかし伊藤のごとく死にて見せなむ」のような気概を感じさせる歌も存在する。この歌の解釈については今日、「伊藤の死を朝鮮人民の怒りの結実と見、伊藤のように死のうにもそれができない被支配者ののろい、ととらえる傾向があるようだ」³¹が「むしろこの歌は、斎藤三郎が指摘する「高きより飛びおりのごとき心もてこの一生を終るすべなきか」と、そのほか『一握の砂』の「いたく錆びしピストル出でぬ砂山の砂を指もて掘りてありしに」「大といふ字を百あま

り砂に書き死ぬことをやめて帰り来れり」^{きた}「森の奥より銃声^{きこ}聞ゆあはれあはれ自ら死ぬる音のよろしき」などの歌と同じ系列において考えるべきであろう。啄木は救いのない絶望の中で、死を思いながら果せず、気持は生と死の間を行き来していた。その中で、伊藤の死に、自分の意志や決断によらないで、突然、死が訪れる場面を夢みた歌としてみたい。」³²とするものがあるが、最後の部分「啄木は救いのない絶望の中で、死を思いながら果せず、気持は生と死の間を行き来していた。その中で、伊藤の死に、自分の意志や決断によらないで、突然、死が訪れる場面を夢みた歌としてみたい。」は、恣意的な文学的解釈に過ぎ、筆者はそこに「気概」を見だし、その「気概」が啄木の日本論を産み出していったと考えたい。啄木においては、激烈な批判癖と自虐性は表裏一体のものであり、自己否定の強さと共に他者否定も強烈な詩人、文学者は洋の東西を問わず存在し、その多くは破滅的な最期を遂げることが多い³³。啄木もそうしたタイプの人間であったと考えられる。もっとも啄木の場合には、日本の文学者には珍しく「国家」の問題を正面からとらえ、「国家」を「敵」とみなす位置にまで立つこととなった。そこに啄木の日本論の特色が存在すると言えるのではないかと考える。

4. 石川啄木の対外論

ここに言う石川啄木の対外論とは中国や朝鮮、ロシアに対して啄木がどのような考えを持っていたかを指す。

石川啄木の生きた時代は、鹿鳴館時代（1884-1887）から国権の伸長、日清・日露戦争を経て国権が確立されていく時代であった。大逆事件は国権の確立へ向かう日本にあって象徴的な事件であったが、石川啄木は日本の文学者には珍しく政治を避けて国家を敵とみなし、無政府主義に傾倒していく。

1912年（明治45）弱冠27才で肺結核のために啄木は亡くなるが、亡くなる前年にもトルストイの日露戦争論を写したり、クロボトキンの『ロシアの恐怖』を写し、製本したりしている³⁴から、外への眼を持ち続けたと言える。

従来の研究では上述のようにロシアとの関係は論述されているが、啄木の中国との関係はあまり論じられることはなかった。『一握の砂』の中には次のように中国人を詠んだ歌が2首ある。「朝な朝な支那の俗歌をうたひ出づるまくら時計を愛でしかなしみ」（「忘れがたき人人」一の項）。「むらさきの袖垂れて空を見上げゐる支那人ありき公園の午後」。異国の風物、人として「支那の俗歌」や「支那人」を詠みこんでいるだけで特に注意すべきものではないが、啄木は日清・日露戦争を経たあとで「林中書」1907年で次のように述べているから、当時の、日本を中国やロシアより上に見ようとする風潮からある程度は自由であったと言えよう。

日清戦争が済んだ時、人は皆杯をあけて^{いぬ}狗口の如く躍り上つた。そして叫んだ『帝国の存在は今世界の等しく認むる所となれり！』当時十歳であつた予は、之を聞いて稚心にも情なく思つた。お祭礼の日の^{さかなちやう}肴町の人込で、「此処に居るのは俺様だ」と威張つて、衆人^{みんな}に振向かれ

て、「成程アンナ奴も来て居るのか」と思はれて、それで何が名誉なのか、当時の予が僅か十歳の小児であつた如く、当時の日本も亦、実に哀れなる小児ではなかつたであらうか。爾後、所謂「臥薪嘗胆の十年間」が過ぎて、日露戦争が始まつて、済んで、遂に今日となつた。人は、「日本は一躍して世界の一等国になつた」といふ。誠にめでたいお芽出度話である³⁵。

翌1908年（明治41）10月16日に『岩手日報』に掲載された「空中書」でも「而して、や兩國共に嘗て一度帝国と兵を交へて敗る。此を以て邦人較もすれば兩國を侮らむとす。浅慮短見、言動何すれぞかの誇大妄想狂者に類する。卑んで又憐むべからずや。帝国は未だ嘗て清露兩國に勝たざるなり。敗れたるものは、清国に非ずして北京政府と其軍隊のみ。露国に非ずしてザールの政府と其軍隊のみ。」³⁶と述べているから、啄木が当時の「兩國を侮らむ」とする風潮から自由で、中国やロシアが「敗れた」のは武の面でのそれに過ぎないと考えていたことが見てとれる。

1911年（明治44）は辛亥革命の起こった年である。啄木は明治44年11月10日の当用日記で「夕方、三月振りて並木が来た。支那の騒ぎで直接間接大分損をしたと話してゐた。予は支那分割論をといた。満州だけを満朝にくれてアトは共和国にさせようといふのだ。」³⁷と記し、当時支那分割論、列強との協調による支那保全論、犬養毅らによる日支提携論がわき起こった³⁸中で支那分割論を支持している。又、同年11月1日に佐藤真一に宛てた手紙では、体調の良くないこと、そこから生ずる焦燥感を述べるとともに「革命戦が起つてから朝々新聞を読む度に、支那に行きたくります。さうして支那へ行きさへすれば、病気などはすぐ直つてしまふやうな気がします。」³⁹と記し、当時の日本の中国への熱気のようなものを反映した文章を残している。

啄木の中国への考えは総じては「空中書」で述べられたような「侮ら」ない姿勢を基本とするものであったと考えられる。

啄木はロシアに対してどのような考えを持っていたのか。

1904年（明治37）2月10日、大日本帝国はロシア帝国に宣戦布告する。（明治）天皇の対ロ宣戦の詔勅には「韓国ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所」であるのにロシアは中国との盟約や列国への度重なる宣言にもかかわらず「依然満州に占據シ」「終ニ之ヲ併呑セム」とし、（明治）天皇は恒久平和を維持せんと「屢次折衝ヲ重ネシメタルモ、露国ハーモ交議の精神ヲ以テ之ヲ迎」えず、「韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ」「今日」「将来ノ保障」を「旗鼓の間ニ求ムルノ外ナシ」という事態に到ったとある⁴⁰。

『太陽』第10巻第11号明治37年8月号に掲載された「マカロフ提督追悼の詩」はロシアの「英雄」の死を悼み、「敵ながらあっぱれな武人として称賛する」「日本古来の武士道精神」によって啄木が作ったとする⁴¹説がある。それに対して岩城氏は「敵ながらあっぱれと称賛する」の「あっぱれ」は、「感動して発するあはれの転じたもの」即ち「あわれ」で「『かわいそうだと思う心、同情を引くこと』と解釈したい。」⁴²と言う。岩城氏は4月25日の『東京朝日新聞』の栗島狹矢「戦争の詩嗚呼マカロフ提督」の「あつぽ適れなりやマカロフ提督／世界の兵家とうたはれ／武烈の冠みそらの星を飾れど／運命、其身を占ひ知らず／無惨や、一撃、浪の穂を踏む／凄じや大將軍旗／烟のうちに落ち／怒濤千丈さかまき崩るゝ中に／偉人の姿、もろく消江て／みなわ今し水沫の、嗚呼、あともとゞめず」や『日露

戦争実記』第11篇に掲げられた短歌の「適れ」「あはれ」はその意味の「あはれ」即ち「無残な死を選んだ敗將への憐憫」であるとする。又、4月18日の『東京朝日新聞』の「マ提督の陣没」と題する2首⁴³「提督も覚悟しつらむ今更に乗りかゝりたる船いくさとして 巽子」「名将と煽てる人の口よりも先ず水雷に乗りし提督 山亭」と比較して、啄木の「マカロフ提督追悼の詩」には「擲槍や批難はなく、十九歳の詩人にしては格調の高い秀作で、マカロフ提督の追いつめられた心情や、死を賭して日本連合艦隊と戦った老將軍の真実に迫っている。」⁴⁴としている。

開戦まもない1904年3月3日から3月19日にかけて『岩手日報』に掲載した「戦雲全録」で啄木は、日露戦争を義戦としてとらえ、その日露義戦論は鹿野政直氏の言うように二つの柱、つまり①この戦争が、ドレイ状態にあるロシア国民に、みずからの解放にたちあがる機会をあたえるであろうという視点、②この戦争が日本の文化的発展に資するであろうという視点から成っていた⁴⁵。しかし、この啄木の日露義戦論は、半年後の雑誌『時代思潮』第8号（明治）37年9月5日に掲載された、トルストイの日露戦争論「Tolstoy on the war」を読むことによって変更を余儀なくされた⁴⁶。

1908年（明治41）10月16日『岩手日報』に掲載した「空中書」では、既引用のように「敗れたるものは、清国に非ずして北京政府と其軍隊のみ。露国に非ずしてザールの政府と其軍隊のみ。」とし、「武」を中心として世界を見ることを否定し、平等主義への視点を覗かせている。啄木には世界を「連続」で見る視点が存在する⁴⁷。

啄木の朝鮮半島とそこに住む人々に対する考えはどのようなものであったのだろうか。

1909年（明治42）10月26日午前9時30分、伊藤博文はハルピン駅頭で韓国人安重根^{アンジュンゲン}によって暗殺される。安重根は韓国黄海道の出身で反日義兵運動に参加していた。安重根は1910年3月26日死刑となる。1909年11月4日付の『朝日新聞』に掲載された歌九首、詩人不知は啄木の作品であると言われ⁴⁸その中の「しかはあれ君のごとくに死ぬことは我が年ごろの願ひなりしか」は「高きより飛びおりるとき心もてこの一生を終るすべなきか」や「誰ぞ我にピストルにても撃てよかし伊藤のごとく死にて見せなむ」（『一握の砂』所収）と同じ心情、「気概」を吐露したものと考えられる。病弱で、気性の激しい、激烈な批判癖、反権力の意味を持つ啄木にはどこか死に場所を探していたようなところがある。

1909年10月28日、29日、11月9日に書かれた「百回通信」で啄木は「実に何の言ふべきところなきに似たり。吾人の痛悼は深し。然も亦伊藤公にしては能く其死処を得たりとすべし。最後の一瞬時に至るまで国事に身を挺んでたる。故人また潜かに満足とせざらんや」⁴⁹と「其死処」＝死に場所を得たとすべしとしている。更に「唯吾人は此哀悼によりて、事に当る者の其途を誤る勿らん事を望まずんば非ず。其損害は意外に大なりと雖ども、吾人は韓人の慙むべきを知りて、未だ真に憎むべき所以を知らず。寛大にして情を解する公も亦、吾人と共に韓人の心事を悲しみしならん。」⁵⁰と述べ暗殺者安重根の心情を思い遣っている。それは「マカロフ提督追悼の詩」で「ああ偉いなる敗者よ、君が名は／マカロフなりき。」と歌った、既述の岩城氏の「かわいそうだと思う心、同情を引くこと」の意の「あわれ」「あっぱれ」と同質の心情であると思われる。啄木は安重根の行為について更に一步進めて1910年10月13日に「雄々しくも死を恐れざる人のこと巷にあしき噂する日よ」「人がみな恐れていたく貶すこと恐れえざりしさびしき心」と歌い、理解を示している⁵¹。

それより少し前の1910年9月9日夜、啄木は「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつゝ秋風を聴く」と詠んだ。「日本の地図と同じく赤色に塗られれた「朝鮮」の地図」⁵²という説明に対して「日韓併合の政府発表は八月二十九日である。もしそうなら啄木は作歌した九月九日までに新しい地図が入手できたのであろうか。赤色という判定は難しい。」⁵³という指摘があり、それは正しいであろう。又、岩城氏がこの歌を「日韓併合が…日本の将来にとって極めて不幸だとする啄木の立場」⁵⁴を歌ったものとするのに対し、「これは日本中心的な政治的洞察であり結果論になる。むしろ地図に明瞭な朝鮮半島の持つ地政学上の宿命に対する人間的な怒り、同情を主題としてとらえるべきであろう。」⁵⁵とする考えは首肯できるが、筆者としては啄木の暗い将来への不安のようなものをこの歌から読みとるのである。「日韓併合」(=韓国併合)への否定的情調はその暗い将来への不安から生じるものであると考えられる。

5. 結び

以上、考察してきたように石川啄木は27才で夭折したが、国家=強権こそが時代を閉塞させる元凶であると主張し、国家との対決姿勢を鮮明にした。同時に啄木はその日本人特有の自虐性、哀感を歌いあげ、啄木の歌は今も人々に愛され続けている。

啄木の文学・思想の発展を浪漫主義的－自然主義的－社会主義的と三つの時期に分けるのはほとんど一般の定説になっている⁶⁴が本稿で扱った啄木の日本論・対外論は主として自然主義的、社会主義的の時期と関係のあるものである。現在から見れば、いわずもがなの論が見受けられるようにも思えるが、それは現在から過去を鳥瞰的に見ることに帰因するであろう。啄木の提起した国家の問題は現在に到るものなお、解決されていない。

日清・日露の両戦争の後、日本には近隣の中国、朝鮮半島の人々を軽蔑する風潮が瀰漫していったのは本稿の石川啄木の対外論でとりあげた「林中書」や「空中書」を読めばわかることであるが、近隣諸国とのよりよい関係を築くには過去との関係、過去の互いの相手への見方等を再検討する必要があるであろう。日本人には世界を序列化して見る傾向が強い。しかし、我々は現在、新たなパラダイムを創出しなければならない位置に立っている。本稿がそのための一助となるなら、幸いである。

付記

本稿は2012年6月9日(土)日本比較文化学会 第34回全国大会(於岡山市立中央公民館)での口頭発表の内容をもとにしたものであることを付言しておく。

注

¹ 岩城 (S.51) p.318

² 今井 (S.58) p.254

- ³ 今井 (S.58) p.254
⁴ 岩城 (S.51) p.326
⁵ 岩城 (S.60) p.45
⁶ 今井 (S.58) p.255
⁷ 今井 (S.58) p.255
⁸ 岩城 (S.60) p.60
⁹ 今井 (S.58) p.255
¹⁰ 今井 (S.58) p.256
¹¹ 岩城 (S.51) p.337
¹² 岩城 (S.51) p.337
¹³ 岩城 (S.51) p.338
¹⁴ 川崎庸之等総監修 (1990) p.908
¹⁵ 岩城 (S.60) p.208
¹⁶ 近藤 (2000) p.149
¹⁷ 近藤 (2000) p.151
¹⁸ 今井 (S.58) p.257
¹⁹ 今井 (S.58) p.257
²⁰ 『全集』 第四巻 pp.95-100
²¹ 『全集』 第四巻 p.99
²² 小田切 (1980) p.145
²³ 『全集』 第四巻 p.130
²⁴ 小田切 (1980) p.154
²⁵ 『全集』 第四巻 p.230
²⁶ 小田切 (1980) p.163
²⁷ 小田切 (1980) p.164
²⁸ 『全集』 第四巻 p.263
²⁹ 『全集』 第四巻 p.264
³⁰ 『全集』 第四巻 p.269
³¹ 大西 (2002) p.69
³² 大西 (2002) pp.75-76
³³ 中国近現代の文学者魯迅が『摩羅詩力説』で扱った詩人もそうした人が多い。
³⁴ 岩城 (S.51) pp.342-343
³⁵ 『全集』 第四巻 p.100
³⁶ 『全集』 第四巻 p.144
³⁷ 『全集』 第六巻 p.221
³⁸ 大西 (2002) p.66
³⁹ 『全集』 第七巻 p.370
⁴⁰ 岩城 (H.7) p.15
⁴¹ 岩城 (H.7) p.31
⁴² 岩城 (H.7) p.31
⁴³ 「提督も覚悟しつらむ今更に乗りかゝりたる船いくさとて 巽子」
「名将と煽てる人の口よりも先ず水雷に乗りし提督 山亭」
⁴⁴ 岩城 (H.7) pp.31-33
⁴⁵ 鹿野 (S.47) 『全集』 第八巻 p.322
⁴⁶ 岩城 (H.7) p.17
⁴⁷ ここに言う「連続」の視点とは「序列」「階級」で見る視点と対立する視点のことを指す。
⁴⁸ 大西 (2002) p.69
⁴⁹ 『全集』 第四巻 p.193
⁵⁰ 『全集』 第四巻 p.192
⁵¹ 岩城 (H.7) p.45
⁵² 岩城 (H.7) p.46
⁵³ 大西 (2002) p.102
⁵⁴ 岩城 (H.7) p.46

⁵⁵ 大西（2002）p.104

⁵⁶ 久保田（S.34）『全集』第八巻 p227

引用文献・参考文献

- ¹ 岩城之徳（S.51）第三章啄木の書誌的研究 一、石川啄木年譜 岩城之徳（S.51）『啄木評伝』学燈社所収
- ² 岩城之徳（S.51）『啄木評伝』学燈社
- ³ 今井素子（S.58）石川啄木年譜 （S.58）特装版文芸読本『石川啄木』河出書房新社所収
- ⁴ （S.58）特装版文芸読本『石川啄木』河出書房新社
- ⁵ 岩城之徳（S.60）人物叢書『石川啄木』吉川弘文館
- ⁶ 川崎庸之等総監修（1990）『読める年表・日本史』自由国民社
- ⁷ 近藤典彦（2000）『啄木短歌に時代を読む』吉川弘文館
- ⁸ 石川啄木（1980）『石川啄木全集』（『全集』と略す）第四巻 評論・感想 筑摩書房
- ⁹ 石川啄木（1978）『全集』第六巻 日記Ⅱ 筑摩書房
- ¹⁰ 石川啄木（1979）『全集』第七巻 書簡 筑摩書房
- ¹¹ 石川啄木（1979）『全集』第八巻 啄木研究 筑摩書房
- ¹² 小田切秀雄（1980）『新編石川啄木の世界』第三文明社 レグルス文庫
- ¹³ 大西好弘（2002）『啄木新論』近代文芸社
- ¹⁴ 岩城之徳（H.7）『石川啄木とその時代』おうふう
- ¹⁵ 近藤芳美（1975）『石川啄木《悲運の民衆詩人》 朝日ジャーナル編集部編（1975）『新編 日本の思想家 中』朝日選書45 朝日新聞社所収
- ¹⁶ 朝日ジャーナル編集部編（1975）『新編 日本の思想家 中』朝日選書45 朝日新聞社
- ¹⁷ 田中礼（2002）『啄木とその系譜』洋々社
- ¹⁸ 鹿野政直（1979）（（1979）『全集』第八巻所収）

引用文献・参考文献の提出順序は基本的に本文の注で引用した順序になっている。

なお、「啄木」の「啄」の字は便宜上、旧字体ではなく現在、通用している人名用漢字「啄」の字を使用したことを付言しておく。

（藤田昌志 三重大学准教授）